

## 運動場に大型バスが置いてあった思い出

私は、子どもの頃、高瀬町の勝間小学校に通っていました。今でも不思議なことがあります。それは、学校の運動場に立派な大型の観光バスが置いてあったことです。おそらく、少し前までは、多くのお客さんを乗せて走っていたのだろうと思われる大きなバスでした。乗用車もあまり普及してない時代に、大型バスですから、その姿は、驚き以外の何ものでもありませんでした。

昭和45年前後のことだったと思いますので、現在の大型観光バスと比べたら一回りも二回りも小さいのですが、それでも、クラス全員（40人はクラスに子どもがいた）くらいは、余裕で座ることができるバスでした。それが、学校の運動場にずっと置いてあったのです。

もしかしたら、朝礼（全校集会みたいなもの）で、校長先生から説明があったのかもしれないし、担任の先生が話をしたのかもしれませんが、聞いていなかったのか、話してくれていなかったのか、聞いていたけどその話はすぐに忘れてしまった（頭の中には残らなかった）のか、とにかく学校の運動場に大型バスがいつも置いてあることが不思議でたまりませんでした。あのバス、運動場までは自分で走ってきたのだと思いますが、それからは、ずっと学校の運動場に置きっぱなしでした。もうお客さんを乗せて走らないバスをどうして運動場に置いてあるのだろうと、登校してバスの姿を目にする度に不思議に思っていました。

結局、そのバスを何に使ったのかということですが、実は、学校の運動場にあったのはバスだけではなくたのです。何と信号機のある交差点や踏切（さすがに汽車は置いてなかった）もありました。集団下校の時は、毎回、横断歩道や踏切を渡る練習をしてから（合格してから）帰ったものでした。そう言えば、バスの横から道を渡る時の練習（バスで見えにくいので飛び出さない等）もしていました。

普段は、そのバスの中に入ることはできません。もちろんそれを許可したら、先生方が子どもたちを叱りつける回数もすごく多くなっていたことでしょう。

時々、担任の先生と一緒にバスの中に入って、バスの中での過ごし方を勉強しました。一番ワクワクしたのが「秋のバスで行く遠足」の前に、実際にバスに乗って座席を確認することでした。担任の先生が、ガイドさんのように通路の真ん中に立ち、私たち子どもは、決められた席に座って、遠足の時の注意を聞くのです。今考えたらすごいことです。いくら校長の私が、がんばっても、さすがに勝間小学校の校庭に大型バス1台を置くことはできません。当時の勝間小学校の校長先生にはとてもかないません。

その理由ですが、当時の情報を4つ年上の姉や母に聞いて、何となく分かってきました。当時、勝間小学校は、交通安全教育の研究指定を受けていて、昭和45年には文部大臣（現在の文科大臣）表彰を受けていたのです。つまり、交通安全の研究指定校だったのです。全国でもトップクラスの交通安全教育が進んでいた学校だったのです。それで、校庭に信号機のある交差点や踏切、大型バスまで設置していたのだと思います。私が小学校の低学年か中学年くらいまでは、バスや信号機は校庭にあったような気がします。現在、校長をしていて思うのですが、これは、なかなか実現できることではありません。地域の方々や交通安全協会等と協力して実現できたことなのでしょうが、「すごい！」としか言いようがありません。

もっと不思議なことは、そのバスがいつの間にか無くなったことでした。あんなに大きなバスを、どうやって移動させたのでしょうか。レッカー車のような物で引っ張ったのか、もしかしたらバスがまだ動いて誰かが運転して他の場所に移動させたのか。実は、何年間、バスが運動場に置いてあったのか、長いと思っていたけれど本当は数か月間だったのかもはっきりとは覚えていません。5年生や6年生の時だったら、きつとしっかり覚えていたかも知れませんね。とにかく、「運動場に大型バスがあった学校」に通っていたことだけは事実なのです。

## 顔を洗ったら、まず手を拭きなさい！

「トイレの神様」の歌ではありませんが、私の幼い頃の記憶は、母親との思い出よりは、近所に住んでいた祖母との思い出の方がはるかに多いのです。祖母とは、一緒には住んでいなかったのですが、当時としては珍しく、私の両親は、ともに勤め人だったため、日中は、祖母と接する機会が圧倒的に多かったからかも知れません。明治生まれで、少しだけですが代替教員をしていた祖母は、結構、いろいろ細かな所まで私に教えて（しつけて）きました。そのいくつかを紹介します。

冬のある日。私は、水道の蛇口から水を出して顔を洗っていました。顔を洗い終わって、タオルで顔を拭こうとしたら、私の後ろに立っていた祖母に、「こら、手を拭きなさい。」と叱られました。「顔を洗ってるんやから、顔を拭くやろ！」と反論すると、「手を拭いてから顔を拭くんや！」と言われ、仕方なくその通りにしました。すると、祖母は、「それでええ。先に顔を拭いたら、手についている水が袖の中に流れ込んでくるやろ。先に手を拭くと、袖の中が濡れんでええんや。」と。ここで私は、何とかやっと納得できたのです。それでも、本当にそうなのかなあとは思っていました。

別の日に、私は、水道の蛇口から水を出して顔を洗っていました。近くに祖母はいませんでした。顔を洗い終わって、タオルで顔を拭きました。祖母の言葉なんてすっかり忘れてしまいました。すると、すーっ、すーっとして手から水滴が流れ落ちて袖の中に入り、長袖のシャツが濡れてしまいました。冷たくて気持ち悪いと思った瞬間、祖母の言葉を思い出しました。それからというもの、顔を洗った後、私は、必ず手を先に拭くようになりました。

これが、暑い夏の日、半袖かランニングシャツを着ていた時に教えられていたとしたら、あまり効果がなかったかも知れません。祖母が、私にこれを教えた日は、寒い冬の日でした。

今では、「お年寄りの知恵袋」なんてことを理解できますが、幼い子どもにとって、大人から教えられることって、結構、理解できていないことの方が多いのかも知れません。でも、私は、教育（教え）というのは、肥やしのようなものだと思っています。肥やしが土にしみこんで、すぐにではなくてもいつか効く時がくるように、教育も子どもの心の中にしみこんでいて、いつか必ず効く時がくると思うのです。

（前にも書いたので知っている人もいるかと思いますが）今朝のように冬の寒い朝、祖母は独り言のように学校へ行く準備をしていた姉と私に言いました。「こんな大霜の寒い朝こそ、ちょっと辛抱しといたら、昼間は、ぬくう（暖かく）なるんや。」と。白い息を吐きながら、日陰を走り、日向になったら歩き、それを繰り返し「寒い、寒い！」と言いながら登校した日の昼間。運動場で上着を脱ぎ捨てて走り回る私たちがいました。還暦を過ぎて（きっと、あの時の祖母と変わらないくらいの年になって）祖母のあの言葉を思い出すと、どう考えても天候のことだけを言っているようには思えないのです。今の私には、50数年前の祖母のつぶやきは、人生についての教訓としか思えないのです。

そんな祖母が一年中で一番輝いて見えたのが、「お餅つき」の日でした。家族や職人さんが数十人集まった「ひろな」（広場のような家の庭）で、餅つきの全ての指揮をするのが祖母でした。この日ばかりは、いつもは祖母を怒鳴りつけている祖父も、何も言わずに従っていました。朝から餅米を炊いて（祖母が指揮：お母さんたちの役割）、臼と杵で餅を何回もついて（祖母が指揮：お父さんや職人さんたちの役割）、餅のかたまりから1つ分の餅をどんどんちぎり取り、軽くもんで、ぽんと板の上に投げる祖母の姿は、とてもかっこ良かったです。それを私たち子どもが、さらにきれいに丸めて、板でできた大きな長方形の入れ物の中に並べていきます。一日がかりの大仕事で、その入れ物は、何十枚もできていました。

そういえば、このような餅つきは、もう長いことしていないように思います。

## わが家に金魚たちがいた風景

娘がまだ幼い頃の事です。今から20年以上前の話になるのでしょうか。わが家の台所に置いてあった水槽の中に、金魚たちが泳いでいました。この金魚たちは、夏祭りの「金魚すくい」で娘がすくったのでした。

夏休みのある夜、家族で夏祭りに行って出店を回っていると、娘が、「金魚すくいをしたい！」と言いだしたのです。その時、『もし、金魚をすくえてしまったら持って帰らなければいけない、帰ると水槽を用意して、ポンプとかエアータンとかの機械も買ってきて金魚を飼わなければいけない、えさもやらなければいけない、水槽の掃除もしなければいけない。きっと、自分が金魚係になってしまう。』と、その後のことが私の頭をぐるぐるとかけめぐりました。その一方で、『一度くらいは金魚すくいも経験させてやりたいなあ。まあ、まだ幼い娘なので、きっと金魚を上手くすくうことはできないだろう。残念だったねとぐさめて、金魚の代わりに綿菓子か何かを買ってやればそれで済むだろう。』と、自分の都合のいいように後のことを想像してもしました。

「おじょうちゃん、がんばってや！」と金魚すくいの店のおじさんが、ポイを1本娘に渡してくれました。私は、「がんばって、金魚をゲットしてよ！」と言いながら、心の中では『どうか、1匹もすくえませんか！』と願っていました。本当に残念(?)ながら、もう少しですくえそうになった時、ポイの紙は破れてしまい、持ち上がっていた金魚は、仲間たちが泳いでいる水槽の中にポチャンと音を立てて入っていきましました。「あーあ。」と、とても悲しそうな娘の顔を見て、私は、ほっとしていましたが、お店のおじさんは、「おじょうちゃん、残念やったな。これは、おまけや。」と、もう1本、ポイを渡してくれたのです。「よかったね。今度こそ金魚をすくってよ。」と、おそらく顔を引きたせながら、『よけいなことをしてくれなくていいのに。』と思いながら、娘を応援しているふりをしたと思います。困ったことに、2回目になるとコツをつかんでしまい、何と娘は見事に金魚を1匹だけすくうことができたのです。おじさんは「よかったね、おじょうちゃん。袋に入れてあげるよ。」と言いながら、水槽の中の金魚を5、6匹すくって、その袋にいっしょに入れてくれたのです。まあ、こうなれば1匹でも6匹でも7匹でも同じことです。娘は大喜びで、金魚たちの入った袋を持って家に帰りました。そして、その日から、私のいきもの(金魚)係が始まりました。

しばらく経った夏の晴れた日。妻と娘が出かけている間に、私は、金魚たちを小さな「おけ」に移し、ベランダの日陰の所に置いて、水槽の掃除を始めました。あまり大きな水槽ではなかったのですが、思い切って、隅々まで掃除をしたため1時間以上かかってしまいました。そして、カルキ抜きをした透き通った冷たい水を入れてポンプやろ過の機械をセットし、金魚を水槽に戻そうとした時には、作業を始めて2時間は経過していました。『きれいになったぞ。金魚さんたちも気持ちよく泳げるぞ。』と、いつの間にか、すっかり「いきもの係」としての自覚を高めた私は、ベランダのおけを見てがく然としました。日陰だった場所は、いつの間にか太陽がガンガン照りつける日なたになっていて、金魚たちは、全部お腹を上にして浮いていたのです。「しまった！金魚たちが死んでしまう！」と、私は、急いで金魚たちをお湯のようになってしまったおけから水槽に移し、祈るように様子を見つけていました。金魚たちは、まだ上を向いたままでした。『金魚たちが死んでしまった、娘に何と言おう。』と思っていると、急に、金魚が一匹、一匹とひっくり返り、やがて全ての金魚が元気に泳ぎ始めたのです。何とか間にあいました。これこそ、金魚の命を救った「金魚すくいだ！」と、その時は、決して思いませんでした。とにかくほっとしました。そして、いきものを飼うということは、そのいきものたちの命を自分が左右してしまうことになるのだと心から思い知らされたのです。

金魚たちは、それから数年間、わが家で暮らし(私のいきもの係はしばらく続き)、その後、近くの池に放しました。それから、娘が高校に入学するまで、わが家でいきものを飼うことはありませんでした。マンチカンの短足、キャリコ(三毛)の女の子の猫「なお」が、わが家に来るまでは…。

あの金魚たちは、その後どうなったのかは分かりません。水槽の中とは違って自由にはなりませんが、厳しい自然の中に放たれたので、他の大きな生き物に食べられてしまったかもしれません。いや、奇跡の復活を果たした金魚たちなので、あれからも生き延びたのかも知れません。

## 宝くじは買わないと当たらない

昨年の年末に、コロナ禍のため4～5年は会っていなかった友人と、お酒を飲みながら、こんな話をしたのを思い出しました。

私：「年末ジャンボ宝くじ、1等は7億円、前後賞合わせると10億円だよ。もう買ったの？」

友：「もちろん買ったさ。3,000円の運試しだよ。連番で買ったので300円は確実に当たるから実際は2,700円の出費だけ。」

私：「でも、まず当たらないよな。お金の無駄遣いだと思わないか？」

友：「そう思う人は、買わなきゃいいだろ。まあ、実際、1等が当たる確率は2,000万分の1らしいよ。10kgの米袋を40袋集めて、その中の米1粒くらいの確率らしいよ。」

私：「2,000万分の1か。それ1枚買って当たる確率でしょう？多くの人は、10枚セットで買うから10枚だと200万分の1ということになるのかな。」

友：「さすがは、学校の先生だな。計算上ではだいたいそんなところかな。だいぶ確率が下がったな。」

私：「とは言っても、10枚買って、香川県の赤ちゃんからお年寄りまで全部合わせた2倍以上の人の中で1人だけ当たるという計算だろ。さっきの米に例えたら、10kg4袋のうちの1粒。そりゃ無理だ。絶対に当たらないわ。」

友：「だから、そう思う人は買わなきゃいいの。逆に考えてみな。まず当たらないから買わないの？全国で毎年23人も1等に当選する人がいるんだ。高額当選の可能性があると思わないか？」

私：「なるほどな。今のは、なかなか説得力があるなあ。」

友：「宝くじは買わないと絶対に当たらないんだよ。買ってまず、当たらないんだけど買わなければ絶対に当たらないんだよ。でも実際は、当たるなんて夢にも思っていないよ。もし当たったら、抽選結果が出るまで『夢を見させてもらっている』のかな。そして、やっぱり当たらなかった時は、『このお金の4割は、県や指定都市に納められ、防災や教育、福祉などに使われるのだから、県に寄附したようなものだ。』と自分を納得させているんだ。」

私：「なるほどなあ。しょうもない話をしていたと思っていたけど、けっこういい話だったよ。」

友：「そうだろ。学校の先生は、頭が固いから、時々、柔らかくなるようにほぐしてやるわ。という事でこの店は、お前のおごりだな。授業料だ、安いもんだろ？一人2,700円だ。頼んだよ。」

私：「宝くじの値段と同じじゃないか、宝くじ買った方がよかったなあ。」

友：「今度からそうしろ。大きく当たりますように。」

こんな話を？と思われる方もいらっしゃるかと存じますが、何気ない酒の席で、私はけっこう大切な考え方を再認識しました。もちろん宝くじを買う買わないの話ではありません。

- 自分でやろうと決めた事は、少しでも可能性がある限りあきらめないということ。何もしなければ何も始まらない。物事は、やってみないと分からない。
- 物事は、一方向からではなく、逆に考えてみることも大切。ネガティブな考えもポジティブな考えになるかも。
- 先のことを、いいイメージで描くことは、今を楽しく生きることができるということ。
- 思ったような結果にならなかったとしても、自分自身が納得できる答えを導くことも大切。
- 簡単に物事をいい悪いと判断するのではなく、できるだけ情報を集めてから判断することが大切。

友人には、「宝くじ買った方がよかったなあ。」なんて言いましたが、本当は、こんな話ができよかったと思いました。違う仕事をしている人、違う地域に住んでいる人、自分とは趣味・趣向が違う人、年齢が違う人など、様々な人々とのコミュニケーションは、「楽しかった、つまらなかった」だけではないのだと思います。これも、話してみなければ分からないですね。